好きだと言って・・・

ワタマー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
好きだと言って・・・

【Ｎコード】
Ｎ０３０４Ａ

【作者名】
ワタマー

【あらすじ】
いつも蘭との約束をすっぽかしている新一・・・。今日は、ＫＩＤが狙いそうな宝石がおいてあるという宝石展に誘おうと思っていた。・・・が、また事件でどこかへ行ってしまった新一・・・。蘭は行くのをあきらめていたが、そしたらそこへ・・・・・・・

（前書き）

新×蘭中心で『ゲロ甘』ですッッッッ^^；；
苦手な方はすぐに降りてください。

貴方は何時だって仕事が優先で……
私が本当は我慢している事、解っているの？
偶の約束はすっぽかして置いて……
電話越しに謝ってそれでお終い。
貴方が本気で謝っていると解ってしまうから……
私が貴方を許してしまう事を知っているから……
何時だって貴方は甘えてばかり。

ねぇ、
だから好きだと言って。
偽りない貴方の心で囁いて。
貴方がそういう事、苦手なの知っているから……
言ってくれたらそれだけで許してあげるから。

ねぇ、
だから好きだと言って。
それだけで私、物分かりの良い女でいるから。

『ごめん、蘭……』
電話越しの新一の声を聞きながら、蘭は小さく吐息を吐いた。
我ながら甘いと思う。
園子辺りに知られたら、散々新一の悪口を言う事だろう。
尤も園子だとて、事が京極真の事になれば、蘭が新一を許す以上に寛容になってしまう事を蘭は知っているのだけれど。
「今日みたいな日に殺人なんて事をする人の気が知れないわね」
諦めを篭めた一言に、新一が電話越しに笑うのが聞こえる。

『それに附いては同感だな。ごめんな、帰ったら……』
「新一の家でご飯作って待っててあげる」
『蘭……』
「でも7時までよ？1分でも過ぎたら帰りますからね」
『サンキュ！蘭と飯が待ってるなら、即行で事件解決して帰れるように頑張るさ』
この科白、前にも聞いたな、と思いながら、その時新一が少々無茶な事をして犯人を燻り出したと後から聞いた事も思い出す。
「無茶は、駄目よ？」
『……解ってる。あの時みたいに怒られるような真似はしねぇよ』
新一の声が神妙なのは、以前無茶をした時には新一が怪我をしていた為に蘭がひどく心配して泣いて怒ったからだろう。無茶をしない、という言葉は宛てにはならないけれど、少なくとも怪我をしないで帰って来てくれるだろう事は信じられるから、蘭は苦笑して頷く事にした。
「気を付けて」
『ああ、サンキュ！』
また後で、と言って切れた携帯電話を見詰めて苦笑する。無粋な不通音すら愛しいなんて、本当にどうしようもない。
蘭は自分に苦笑して、新一を誘おうと思っていた宝石展のチケットを取り出した。
今話題になっている宝石展で、展示されている宝石の中に、彼の怪盗ＫＩＤが狙いそうな宝石があるというので、予告状も届かない内から警備に力を入れていると評判なのだ。宝石自体に興味はないが、ＫＩＤが狙いそうな宝石というのには興味がある。
新一が怪盗などには興味がなく長く行方不明になる前には話を聞いた事もなかったのだが、園子のところの『漆黒の星』が狙われ、ＫＩＤが蘭に変装してまんまと盗み出した黒真珠を、コナンがたった一人で取り戻して話題になった。その後も、頻繁ではないものの、コナンと一緒にＫＩＤに出くわす事が何度かあった為、多少の興味

を持つに到った。興味といっても、世の女性達がＫＩＤの格好良さに悲鳴を上げているような意味合いではなく、態々予告状を出して警察を引っ張り出しておいて派手な盗みを働きながら、後でこっそり盗んだ宝石を返していると知って、どうしてそんな事をするのかと疑問を持ったからだ。新一は何かを知っているらしいのだが、蘭が尋ねても教えてくれない。その分、蘭の興味がＫＩＤという男にではなく、行動の意味に向いていると判ってからは、蘭が首を突っ込む事に反対はせずにフォローまでしてくれる。新一のいない所では近付かない、という約束はさせられたが。

「どうしようかなぁ、一人では行かないって約束してるし……」

宝石展が開かれている美術館の前にいるものの、新一との約束を破るつもりのない蘭は困っていた。今日を逃せば、日曜日しか時間の取れない蘭は見る事が出来なくなる。かといって、今日は園子も用事があって今更誘っても来る事は出来ない。父の小五郎は、絵画以上にこういうものに興味を示す事はないから面倒がって来てくれないし、第一今日は新一とのデートの予定だったから、替わりに呼び出したりしたら小五郎は大層怒るだろう。

「ん～～」

「快斗のばかぁ！」

考え込んでいた蘭の耳に突然飛び込んできた女の子の声に驚いて振り返り、以前渋谷の街で見掛けて新一と間違えた少年と連れの少女を見出す。

「あの二人……」

少女は泣きそうに怒っていて、少年が一生懸命謝っている。

「二人で来ようって約束したんじゃない！どうしてチケット忘れるのよォ！」

「だから、家を出る時は持ってたんだって。途中で落としちまったんだよ」

どうやら、あの二人もこの宝石展がデートだったらしい。快斗と呼ばれた少年のチケットがなくて入れないというところのようだ。

蘭は自分の手の中のチケットを見る。宝石展のチケットは一般には極小部数前売りが出されただけで、当日券は手に入らないという話だ。蘭が持っているのは、宝石展の主催である鈴木財閥のお嬢様の園子から回して貰ったからである。
「仕切り直しじゃぁ、気の毒よねぇ……」
うん、と一つ頷いて、蘭は二人に近付いた。

「あのぅ……」
背中から掛けられた声に、青子は驚いて振り返り、勢いでよろけたところを快斗に抱き留められた。
「驚かせてごめんなさい」
声の主は長い髪の青子達と同じくらいの年頃の少女だった。
「宝石展のチケットって、1枚あれば足ります？」
「へ？ええ、あの……」
事態が飲み込めず目を白黒させていると、彼女はニコリと綺麗な笑みを浮かべた。
「良かったら1枚どうぞ。一緒する筈だった相手にキャンセルされてしまって要らなくなってしまったので……」
「え、でも……」
差し出されたチケットを見下ろして視線を上げた青子は戸惑ってしまう。確かこのチケットは希少価値でしかも決して安い額ではなかった筈だ。簡単に貰ってしまって良いものではないだろう。
「気にしないで。実は友人のコネで回して貰ったものだから、元手は"友情"なの」
綺麗にウィンクを決める相手に、青子がくすりと笑う。
「でも、やっぱり……」
戸惑い躊躇する青子に、相手は苦笑して続けた。
「じゃあ、お邪魔をしてしまうけれど、一緒に周って貰って良いか

しら？私、実は方向音痴で一人だと困った事になるから、絶対一人で行くなって言われてるんだけど、貴方達と一緒なら、大丈夫でしょうし……」
少し紅くなりながら言う相手をまじまじと見詰めてしまう。
「あ、うん。お邪魔なんて事ないから心配しないで。こいつとは唯の幼馴染みなの」
柔らかな笑みを目元に刻んで微笑む相手に、青子はドキリとしてしまう。とても綺麗に笑う人だと思った。
「あ、私、中森青子。江古田高校の3年生なの」
「毛利蘭です。帝丹高校の3年生よ」
「わぁ、同じ年なんだね。大人っぽいから大学生かもと思ったよ。こいつは黒羽快斗、青子とはクラスメイトで幼馴染み」
「毛利さんが大人っぽいというよりは、オメーが子供っぽいんじゃねぇのか？」
横から口を挟んだ快斗の脇腹に肘鉄を打ち込む青子に、蘭は目を丸くする。蘭も新一を脅して空手技を使う事があるが、それは飽く迄も新一が避ける事が解っているからだ。新一に対して空手技が決まった事は1度もない。
目を丸くしている蘭に気付いて、青子は小さく舌を出して笑った。
「じゃあ、行こう？」
こうして蘭は思い掛けない形で連れが出来て、宝石展を見る事が出来たのである。

美術館内部には、私服警官が多く待機していた。未だ怪盗ＫＩＤからの予告状は届いていないのに、物々しい警備振りである。
「わぁ、見て見て快斗ォ！すっごいよォ！」
静かに見物する客が多い中、青子のはしゃいだ声は館内に響いていた。

「だから青子と来るの、嫌なんだよなぁ」
ポツリ、と隣から聞こえた声に蘭が振り向く。蘭の視線に気付いた快斗は慌てて口を抑えた。
快斗と青子を見比べた蘭は暫くしてくすり、と小さく笑いを洩らした。
「言ってあげたら良いのに」
青子には聞こえないように言う蘭の気遣いに気付いて快斗は肩を竦める。
「下手な事言うと機嫌を損ねちまうんでね」
「機嫌を損ねたくない相手、なのね？」
見透かしたように微笑む蘭に、快斗は気まずそうに頭を掻いた。
「まぁ、そういう事」
ソッポを向いた儘肯定する快斗の耳が紅くなっている事に気付いて、蘭は笑みを深くした。
「毛利さんこそ、約束キャンセルされたって言ってたけど、彼氏とか？」
「うん、そうよ。仕事が入っちゃってドタキャン」
「仕事って事は社会人？それも日曜って事は、警察関係とか？」
「少しだけ当たってる。彼、探偵なの」
「探偵？」
「そう。それに私達と同じ年よ」
「……まさか、工藤？」
振り向いた蘭の視線の先で、快斗がぽつりと言う。
「高校生探偵の工藤新一？」
「当たり。最近新聞に名前出ないから覚えている人少なくなったみたいだけどね」
悪戯っぽく笑う蘭に、快斗はそっと溜息を吐いた。
まさか、直接知っている、と言うわけにはいかないだろう。
快斗が蘭に会うのは初めてではない。そう、以前にも会っている。
その時、快斗は黒羽快斗ではなく、怪盗ＫＩＤだった。初めて会

った時、彼女は鈴木財閥会長の依頼でＫＩＤ逮捕の為に雇われた探偵・毛利小五郎の娘にして、不思議な子供・江戸川コナンの保護者だった。子供のくせに探偵を名乗ったコナンを揶揄おうと彼女に成り済ました。そして子供を甘く見た事が失敗に繋がった。江戸川コナンの存在が、仕事を成し遂げるにあたり大きな障害になった。中森警部をクビにさせない為に討った芝居と違って、コナンには本当にＫＩＤとしての黒星を味合わされたのである。

その後、調べていく内に、江戸川コナンの正体が、高校生探偵・工藤新一である事に気付いた。

メモリーズ・エッグの時も、奇術愛好家のメンバーのオフ会の時も、そしてＫＩＤの名を騙って黄昏の館に探偵達が招待された時も、蘭の傍にはコナンがいた。

先達てある組織が潰された一件に、工藤新一が絡んでいるという噂が流れたが、真相は闇の中である。その噂の真相は、寺井をして調べ上げる事が出来なかった。

そして、工藤新一が帰還した。

「ありがとう、今日は助かったわ」

「それはこっちの科白よ、蘭ちゃん」

宝石展を見て帰る頃には、蘭と青子はすっかり意気投合していた。快斗が二人の後ろでやれやれと小さく溜め息を吐いている事も知らずに、青子は大満足である。

「じゃあ、また」

「うん。今度はお喋りしようね」

無邪気な青子に蘭も吊られて笑顔になりながら頷いて二人と別れた。

時計を見ればもう夕食の買い物に行くには急がなければならない時間になっていた。

「いっけな～い！」
今日は何にしようかな？
工藤家の冷蔵庫の中身を思い出しながら、蘭は買い物をする為にスーパーに向かった。
宝石展を一緒に見て回った二人は少し前の自分達に重なる。
幼馴染みで、周りからは夫婦と揶揄われ、意地を張って只の幼馴染みと強調していたあの頃。突然新一が帰って来なくなるなんて思いもしなかった。
あの二人も要は切っ掛けなのだろう。蘭と新一が、新一の行方不明という事件のお陰で素直になれたように、あの二人にも何か切っ掛けがあれば、只の幼馴染みから卒業出来るのだろう。
そこまで考えて、我ながら随分と余裕が出てきたものだと呆れる。自分の事で精一杯だった時には、知り合ったばかりの人の恋にまでなんて気持ちが回る事はなかったのに。
余計なお世話に違いない。青子の方は自覚もしていないような気配だが、快斗はしっかりと青子を特別な目で見ているのだから。
「他人の心配より先ずは新一の夕ご飯♪」
誰でもそうだろうが、新一は特に精神的に疲れていると食欲が激しく落ちる。コナンとして毛利家に居候していた時も本当は食欲などないのに、蘭に心配掛けまいとして無理に食べていたのだと、今になって思い当たる節はある。
新一が呼び出されるほどの事件だ。精神的に打撃を受けない事件の筈がない。
「新一が好きなもので、消化の良い物は……っと」
普段より安く売っているもので、必要な材料が揃って、蘭はホクホク顔でスーパーを後にした。
たいして多くならなかった荷物を手に、蘭は工藤家の門を潜る。財布の中から取り出した合鍵は、以前のように阿笠博士から借り受けたものではなく、新一から改めて預けられたものだ。
薄暗くなった外の影響か、屋敷内は灯りがないと幽霊でも出てき

そうである。蘭は急いで玄関先とリビング、キッチンの明かりを点けて回った。
そうして鼻歌を唄いながら料理に取り掛かる。
疲れて帰ってくる新一を蘭が迎えられる時間に、新一が無事に帰ってこれる事を願いながら。

工藤家の門の前に、覆面パトカーが停まったのは、丁度7時5分前だった。
「ありがとうございました、高木刑事、佐藤刑事：」
「今日は折角の蘭さんとのデート、邪魔してしまって済まなかったね」
高木の冷やかしに、新一は少しだけ照れながら、それでも反撃に出た。
「高木さんはこの後、佐藤さんとデートですか？」
「え……」
軽くウィンクしている新一に、高木と美和子と二人揃って頬を紅くしていた。
「それじゃ、おやすみなさい」
新一の足取りが軽い事と、工藤邸に明かりが灯っている事を考え合わせれば、蘭が待っている事は容易に想像が付く．
「良いですねぇ、工藤君は」
思わず零れた本音に、高木は慌てて口を抑える。今は未だ勤務中。美和子は高木の先輩刑事であって、為り立ての恋人ではないのだから。
「……すみません」
「……良いわよ、私も同じ事思っちゃったもの」
少し紅い頬で言う美和子に、高木が思わず振り返る。
「高木君、前見て！前！」

「は、はい！」
その後暫く車内に流れた微妙な空気は、本庁に戻ってから誰にも気付かれる事はなかった。
今頃新一は蘭の手料理にあり付いている事だろう。そう思いながら、一方で、折角のデートを事件の為に呼び出されてしまった新一の所為で、蘭がつまらない思いをしたのだろう、と思いを馳せる高木だった．。

折角5分前に門の前に着いたのだから、アウトにはなりたくなかった。
新一は慌てて門から玄関までの間を駆け寄り、鍵の懸かっていない玄関を開けた。
「ただいま」
あると思った蘭からの返事がない。訝しんでリビングに入った新一は、ソファでうとうとしている蘭を見つける。思わず笑み崩れてしまった。
その時ー。
ボーン。ボーン。……！
ホールの柱時計が鳴り、蘭が目を覚ます。
「お？」
1度眠ってしまうと余程でない限り朝まで起きない蘭が珍しい事だと思いながら、新一はソファに近付いた。
「お目覚めですか？お姫様」
「……新一？」
「ただいま、蘭」
囁くように告げながら、新一は蘭の額に接吻る。
「お帰りなさい」
ふわり、とした笑顔に、新一も釣られて笑みを浮かべる。

「ギリギリセーフ、かな？」
時計の針は7時を2分ほど過ぎていた。
「え、アウト……」
「セーフだよ。蘭が目を覚ましたのは7時の鐘の音だったから。俺はそれを待ってたんだぜ？」
手を貸して蘭を起こしながら言うと、蘭はムーっとしたが、帰り損ねた事で諦めたのか苦笑して言った。
「良いわ。特別に許してあげる」
「本当に間に合ったんだけどな……」
苦笑しながら、新一は蘭をそっと引き寄せて、柔らかく唇に触れた。
「新……ん……」
触れるだけのキスを繰り返していた新一の唇が離れると、蘭はふっと息を吐いて、瞼を上げた。
蘭の視界には、嬉しそうに笑う新一の笑顔が入る。
「新一、ご飯は？」
「飯より蘭が食べたいな♪」
「バカ……」
頬を紅くして俯いた蘭を深く抱き込んで、新一は薄紅くなっている耳朶に唇で触れながら囁く。
「蘭、ただいま」
「お帰りなさい、新一」
常も常も、新一が"仕事"に行って帰ってきた時に、蘭は新一が蘭の処に帰ってきた事を確認したがる。新一が行方不明だった時の後遺症だろうと、新一は蘭を安心させてやる為に、蘭から離れるまでずっと抱き締めている。
「ねぇ、新一……」
「うん？」
新一の指が優しく蘭の長い髪を解き解す。
「私のこと、好き？」

「な、ななっ！」
驚いた新一が慌てて蘭の身体を離すと、蘭は残念そうに新一の背中に回っていた自分の手を見た。
「ねぇ、好き？」
尚も詰め寄る蘭に、新一は思わず後退り、リビングの壁に背中をぶつけて停まった。
「ら、蘭……？」
たじろぐ新一の顔色は真っ赤で、今更何で？と書いてあった。
「新一、いっつも、事件だって呼ばれると行っちゃうんだもの。本当に私の事、好きなの？」
じっと見詰めていた視線をそっと伏せて、蘭は新一の首に腕を巻き付けて、新一の肩口に顔を埋めた。
「解っててても不安になるの。新一、本当に私の事、好きでいてくれるの？」
キスしたり、抱き締めたり、行動ではちゃんと示す新一は、言葉ではなかなか蘭に気持ちを伝えてはくれない。蘭の気持ちばかり聞きたがったり試したりする。
今日は、ちゃんと新一の気持ちを言葉にしてくれるまで許してあげない。
蘭の決心も知らず、新一は狼狽えていた。
テレビも点けていない部屋には、時計の秒針が刻む音だけが響く。
「新一……？」
なかなか言ってくれない新一に、蘭が本気で心配になってきた頃、新一の腕の力が少し強くなった。
「ねぇ、聞かせて？新一、私の事、本当に好き？傍にいて、新一の我儘聞いてくれる都合の良い女の子だからってわけじゃないのね？」
「当たり前だろ？俺は蘭が好きだ。蘭が待っててくれるって言ったから、俺は頑張れたんだぜ？」
強くなる腕の力に酔い痴れながら、蘭は新一の匂いに包まれていた。

「もう1回、言って」
「……好きだ」
「もう1回」
「好きだよ、蘭」
「もう1回」
「……」
新一の顔の赤味が取れるまで言わされる事になるなんて、新一も思いもしない儘、何度も何度も繰り返し、告白させられた新一が、その夜、蘭をなかなか帰す気になれなかったのは仕方ないかも知れない。

（後書き）

＃作者より＃
久しぶりです＾＾
今度は『ゲロ甘』ということ書いてみました。・・・どうだったでしょうか？＾＾；
是非、感想が聞きたいと思います＾＾（聞くのが恐い；）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0304a/

好きだと言って・・・

2010年10月8日13時42分発行